

報道関係各位

2024年6月1日

グラウンド・ワークス（株）

能登地震発災から5カ月。グラウンド・ワークス（株）の断熱施工技術者が
仮設住宅建設に参加してきました。



グラウンド・ワークス株式会社(代表取締役 山下英俊、袋井市川井 873-4)は、今年5月石川県の旧七浦小学校グラウンドに建設中である16棟の長屋仮設住宅現場に参加。

石川県によると5月21日時点で能登地方を中心に全壊や半壊など含めて8万1242棟の住宅被害を確認している。被災地で復旧・復興に向けた作業が急ピッチで進む中、その一翼を担っているのが、自治体と災害時の支援協定を結び、工務店による木造応急仮設住宅の建設に取り組むJBN・全国工務店協会と全国建設労働組合総連合で構成する全国木造建設事業協会(全木協)である。

同社は、断熱工事で災害時の緊急対応として全国にあるデコス社の施工代理店として2020年の熊本豪雨の際も木造在来工法で建設する「木造応急仮設住宅」で断熱施工を行った経験がある。



今回の石川県の仮設住宅も、かたちは熊本での復興住宅と大きな相違はなく、前回のノウハウが活かされた木造長屋となっている。(能登は積雪を考慮し、屋根勾配が強め)
全木協によると、全国から労働者供給事業として3月18日から5月21日の間に延べ1万2976人が応援部隊として送り込まれた。現場監督なども続々と現地入り。

“多くの業者が入り乱れる現場状況でしたが、皆が同じ目標に向かっていました”。

2月上旬には仮設住宅供給のために多くの職人さんが現地入りしていたことを知り、初動の重要性、そして短期間で多くの住戸を供給するためには、膨大な資材と人を集めること、それを運ぶインフラ、寝泊まりする場所が必要であることを肌で感じた。

(現地作業した同社：小松直樹/常務取締役)

<避難生活の長期化にらみ性能向上>

全木協が手がける応急仮設住宅では避難生活の長期化を想定し、性能向上を図っている。避難生活が長期化すると被災者の中には体調を崩す人も多くいる。そのため屋根瓦や吸音性のある(新聞紙をリサイクルした木質由来の断熱材)セルロースファイバーを採用することで、被災者の不安やストレスを和らげ、快適な居住空間を確保するように配慮されており、実際に熊本の仮設住宅に入居されていた方々から「隣の音も気にならず、前の家よりも体の調子がいい」「雨が降っていても気が付かない。以前の家では、雨樋から落ちる音で起きていたが今はそんなことはない」といったご意見を聞くことができた。



セルロースファイバーは新聞紙をリサイクルした木質由来の断熱材

<他人事ではない避難生活>

被災後、以前の生活を取り戻すまでには、かなり長い時間がかかることが予想される。その中で仮設住宅は供給スピード、試用期間、撤去の難易度など様々な観点から判断が必要かもしれないが、数年間は過ぎざるを得ないことを考えると、出来るだけ穏やかな生活を送れる住環境を用意してあげたいというのが、我々グラウンド・ワークスの願い。今回の住宅についても断熱性能等級4(5地域)に相当する断熱性能確保が方針である。冬場の寒さが厳しい地域であり、夏の暑さの中でも過ごしやすい温熱環境を確保できるように、隙間をつくらないブローイング工法で断熱施工を行ってきた。(ブローイング工法は断熱材をエアでホースの中に圧送し、積層させる工法。凹凸や段差、配線や換気用配管周りなど複雑な構造でも隙間なく施工することができる。)

被災地での活動経験も、周知しながら今後の防災活動等に活かしていきたいと考えている。

<お問い合わせ>

グラウンド・ワークス(株) 担当：小松 Mail: komatsu@g-w.co.jp

〒437-0064 袋井市川井 873-4 TEL.0538-45-3313 <https://www.ground-works.biz/>